

宇久町文化財調査報告書第2集

宮ノ首遺跡

1991

長崎県宇久町教育委員会

宇久町文化財調査報告書第2集

宮ノ首遺跡



発刊にあたって

このたび、平成2年度の同庫、県費補助を受けて宇久町本飯良郷にあります宮ノ首遺跡の範囲確認調査報告書を刊行することになりました。

今回の調査は、汐出海岸に県営の古里地区海岸環境整備事業並びに町道本飯良平古線改良工事が計画され、本遺跡が破壊される恐れがあるために、町教育委員会が主体となり実施したものです。

今回の調査によって、繩文時代と奈良時代を中心とした遺跡の範囲が明らかとなるなど、本遺跡は貴重なものであり、考古資料として今後ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、ご指導をいただきました県教育委員会文化課の先生方をはじめとして、ご協力をいただきました関係の皆様に深く感謝を申しあげまして、本調査報告書発刊の言葉とさせていただきます。

平成3年3月

宇久町教育委員会
教育長 川上 榮

例　　言

1. 本書は、平成2年度の国庫補助事業として実施した、長崎県北松浦郡宇久町本飯良郷2965番地外に所在する宮ノ首遺跡の範囲確認調査報告書である。

2. 調査は、宇久町教育委員会が事業主体となり、県教育委員会が調査を担当し、平成2年9月6日～9月18日に実施した。

3. 調査関係者は以下のとおりである。

| | | |
|-----------|-------|-----------|
| 宇久町教育委員会 | 川上　榮 | 教育長 |
| | 橋本　勇夫 | 教育次長 |
| | 大岩　孝 | 参事 |
| | 樋口　忠 | 教育次長補佐 |
| 長崎県教育庁文化課 | 宮崎　貴夫 | 主任文化財保護主事 |
| | 村川　逸朗 | 文化財保護主事 |
| 調査協力者 | 大岩　保雄 | 町文化財保護委員 |
| | 月川　徹 | 同 |
| | 瀬尾　泰平 | 同 |

4. 本書は、III-1を村川が、その他は宮崎が分担執筆した。

5. 本書の編集は、宮崎による。

6. 本書関係の遺物は、現在長崎県教育庁文化課立山分室にあるが、まもなく町教育委員会へ返還される予定である。

I. 遺跡の立地環境

宇久島は、五島列島の最北端に位置する面積27km²ほどの小規模な島である。中央に鐘状火山の城ヶ岳（標高258.6m）があり、四方になだらかな丘陵が展開する地形である。島の人口は、5,800人余、産業は農漁業を中心としている。

島内には、県の重要遺跡（155箇所）として旧石器時代の城ヶ岳平子遺跡、弥生時代の宇久松原遺跡と本遺跡の3箇所があげられ、また50箇所余の多くの埋蔵文化財が存在し、遺跡の濃密な島として知られている。

本遺跡は、昭和38年に瀬尾泰平氏によって発見され、縄文時代前期～中世までの遺物が採集されており、居住が長期にわたることが推測されていた。また、小川の畔岸にアビ貝を中心とした貝層が存在するところから宮ノ首貝塚と呼称され、昭和41年10月22日に町指定の文化財に指定されている。

遺跡付近は、海に向かって傾斜する丘陵と南西から100mほどのびた砂丘によって小規模な後背低地が挟まれたラグーン地形をなしている。低地は水田、飼料畑として、傾斜地は畠地や牛の放牧地として利用されている。
(宮崎)

II. 調査経緯と概要

1. 調査経緯

今回の調査は、沙虫海岸付近に県営の古里地区海岸環境整備事業並びに町道本飯良平原線改良工事が計画され、本遺跡が破壊される恐れがあるために、平成2年度の国庫補助を得て、町教育委員会が主体となり範囲確認調査を実施したものである。

調査は、平成2年9月6日～9月18日の13日間行い、砂浜と砂丘および後背地に2m×2mの試掘場を21箇所、2m×3mの試掘場を1箇所、計22箇所90m²の発掘を行った。

2. 調査概要

遺跡付近の地形は、砂浜、砂丘基部、砂丘、後背低地、丘陵に分けることができる。以下、地域ごとに状況を概観したい。

(1) 砂浜地域

砂浜には、TP. 1～4と21の計5箇所の試掘場を設けた。TP. 2～4は、約1mほど掘り下げたが、海水が湧き出し崩壊し始めたために埋め戻した。黄白色の砂層で、遺物は認められない。TP. 1は、140cmほど掘り下げたところ、安山岩の基盤が露われ、遺物は出土していない。TP. 21は150cmほどまで掘り下げた。土層は、純砂層の1・2層と混疊砂層の3～5層に大別される。遺物は、5層からややローリングを受けた縄文土器片が2点出土し、砂丘基部のTP.



遺跡遠景(西から)



遺跡遠景(南から)



調査風景(TP. 17)



調査風景(TP. 14)



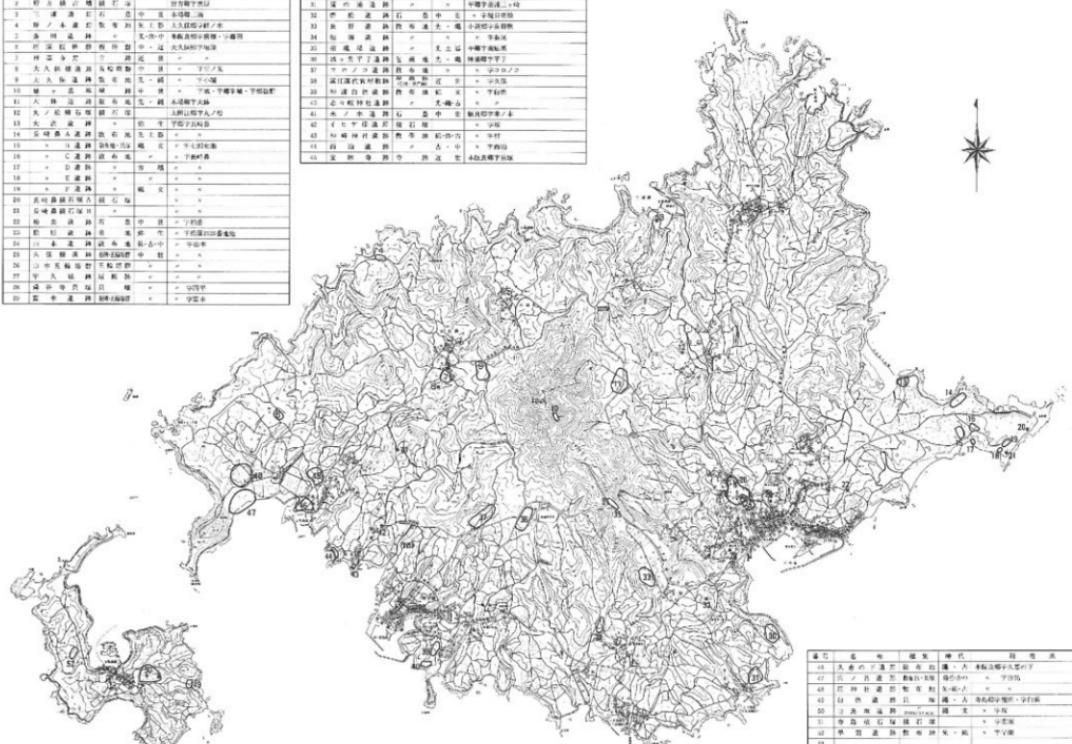
鰐骨出土状況(TP. 5)



鰐骨出土状況(TP. 16)

| 番号 | 名 称 | 地 点 | 形 式 | 目 次 |
|----|-----------|-----|-----|------|
| 1 | 「 」字 墓 | 北山原 | 石室 | 古墳時代 |
| 2 | 「 」字 墓 | 北山原 | 石室 | 古墳時代 |
| 3 | 「 」字 墓 | 北山原 | 石室 | 古墳時代 |
| 4 | 神 木 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 5 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 6 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 7 | 神 木 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 8 | 大 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 9 | 大 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 10 | 大 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 11 | 大 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 12 | 大 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 13 | 大 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 14 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 15 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 16 | 「 」字 墓 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 17 | 「 」字 墓 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 18 | 「 」字 墓 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 19 | 「 」字 墓 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 20 | 古 墓 群 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 21 | G 墓 群 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 22 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 23 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 24 | 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 25 | 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 26 | 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 27 | 木 ト 銅 道 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 28 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 29 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |
| 30 | 石 造 | 木ノ原 | 石室 | 古墳時代 |

| 番号 | 名 称 | 地 点 | 形 式 | 目 次 |
|----|-----|-------|-----|------|
| 31 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 32 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 33 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 34 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 35 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 36 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 37 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 38 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 39 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 40 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 41 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 42 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 43 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 44 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |
| 45 | 石 造 | 西 日 本 | 石室 | 古墳時代 |



第1図 宇久町内の遺跡

| 番号 | 名 称 | 地 点 | 形 式 | 目 次 |
|----|-------------|-------|-----|------|
| 45 | 大 木 の ト 銅 道 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 46 | 大 木 の ト 銅 道 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 47 | 大 木 の ト 銅 道 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 48 | 石 造 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 49 | 石 造 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 50 | 石 造 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 51 | 中 古 代 石 造 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 52 | 石 造 | 南 木 原 | 石室 | 古墳時代 |
| 53 | | | | |
| 54 | | | | |
| 55 | | | | |
| 56 | | | | |
| 57 | | | | |



第2図 調査点の配置及び進路の範囲(1/1,000)

19付近からの流入と考えられる。

(2) 砂丘基部地域

砂丘基部には、TP. 19と22の2箇所の試掘場を設定した。そのうちTP. 19では、拳大から人頭大の石が南側に敷きつめられ、焼土がそれに被ったような状況が検出された。3~5層の砂層からは、多量の巻貝とアワビ貝、イルカ骨(?)等が縄文土器に伴って出土した。敷石の遺構は、縄文時代の炉跡として推測できる。

(3) 砂丘地域

砂丘には、TP. 5・6・10・16の4箇所の試掘場を設定し、先端のTP. 5とTP. 16で遺物の包含状況が捉えられた。TP. 5では、地表から約170cm下の5層から鯨の肋骨と思われる大形の骨とアワビ貝が出土した。土器が共伴していないので時代の限定が難しいが、縄文時代~弥生時代頃のものと思われる。TP. 16では、3層から縄文後期土器と鯨骨等が出土し、1層と2層の境付近から弥生前期末の甕が出土した。

(4) 後背低地地域

砂丘裏側の低地には、TP. 7・8・14・15・17・18の6箇所の試掘場を設定した。

TP. 7では、地表約170cm下の7層(黄灰色砂層)と8層(灰色砂層)に縄文後期の単純な遺物包含層が確認された。また上部層からは、古代~中世の遺物が包含され、中国製輸入陶磁器(青磁・白磁)や滑石製石鍋、馬の蹄骨?等が出土した。1点であるが、越州窯系の青磁碗片があり最も注目できる資料である。なお、白磁頸は、TP. 8でも出土している。

TP. 17では、地表約60~70cm下に大形アワビがぎっしり詰った貝層が、試掘場の南半部に帶状に検出され、馬の歯?や下脚骨?が伴って出土した。出土土器から見ると、古墳時代後期~奈良時代頃の貝塚と考えられる。さらに、地表約130cm下の8層(灰茶色砂層)では、縄文前期の良好な遺物包含層が確認された。

TP. 14では、地表約50cm下に破碎貝を含んだ灰茶色土層(4層)があり、古墳時代後期~奈良時代にかけての土器がまとまって出土し、TP. 17の貝塚と関連をもつ土層と考えられる。また、馬の歯や骨が多数出土しており、注目される。

(5) 丘陵部地域

丘陵部には、TP. 9・11・12・13・20の5箇所の試掘場を設定したが、TP. 9だけに遺物包含状況が認められた。TP. 11・12は、地表約10~20cm下に風化岩盤層があった。TP. 13は、2層(褐色土層)から若干遺物が出土したが、良好な土層でなかった。TP. 20は、元々溜池であった所で、最近の埋土層が被さり、遺物は出土しなかった。

TP. 9では、地表から約80cm下に安山岩の風化岩盤が露われるが、その直上から縄文時代の遺物が出土し、点数は少ないが縄文時代の遺物包含層と考えられる。

(6)まとめ

今回の範囲確認調査によって、縄文時代と古墳時代後期~奈良時代を主体とする遺跡の拡が



TP. 4



TP. 21



TP. 17



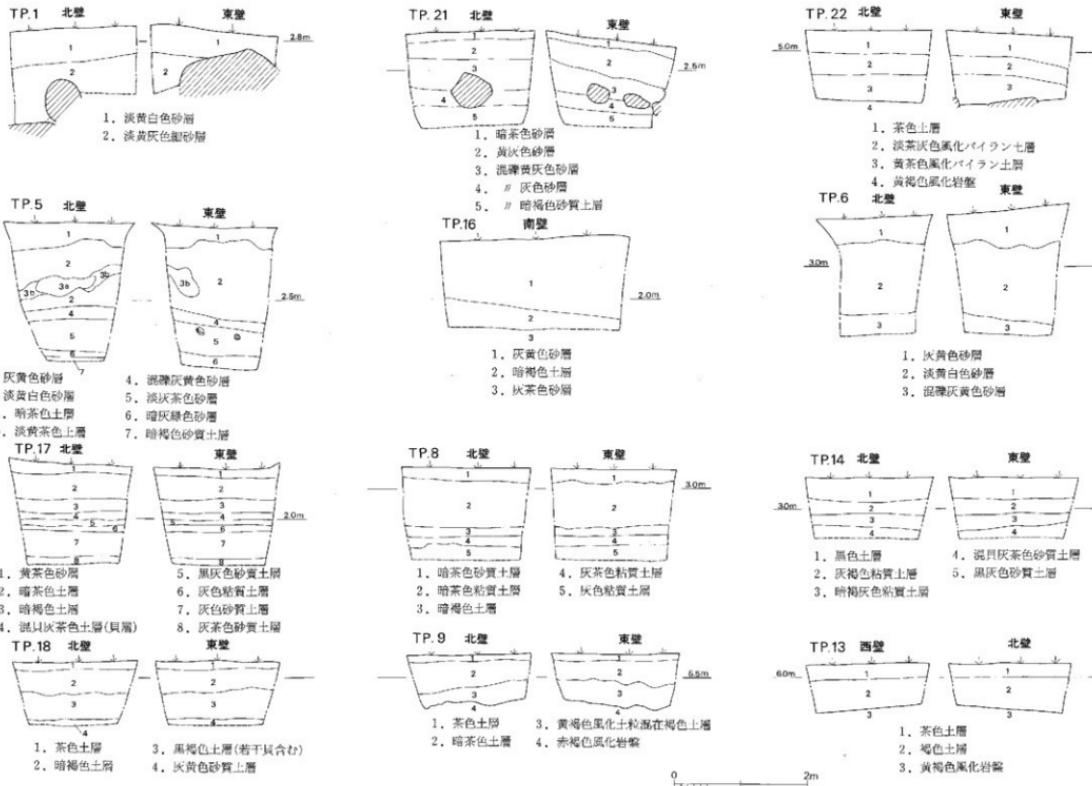
TP. 14



TP. 9

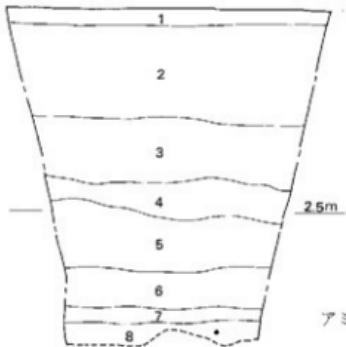


TP. 11

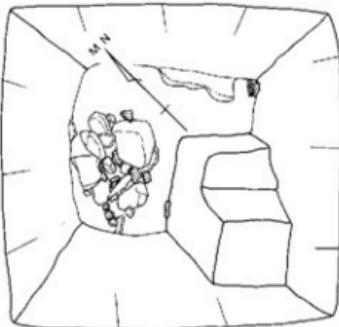
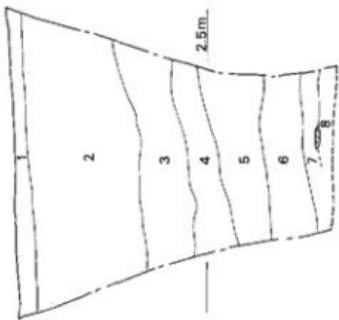


第3図 土層断面図(1/60)

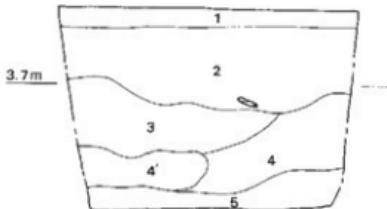
1. 茶色砂質土層
2. 暗茶色砂質土層
3. 暗茶色粘質土層
4. 鮎破碎貝暗茶色土層
5. 暗褐色土層
6. 橙色土層
7. 黄灰色砂層
8. 灰色砂層



アミ点は土器



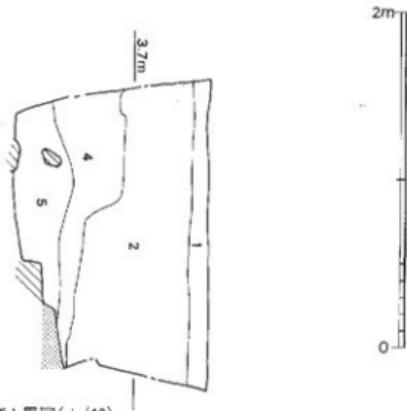
TP.7



1. 暗茶色砂質土層
2. 茶色土層
3. 黄茶色砂層
4. 暗茶色砂層
- 4'. 暗褐色砂層
5. 黄灰色砂層



TP.19



第4図 這構および土層図(1/40)



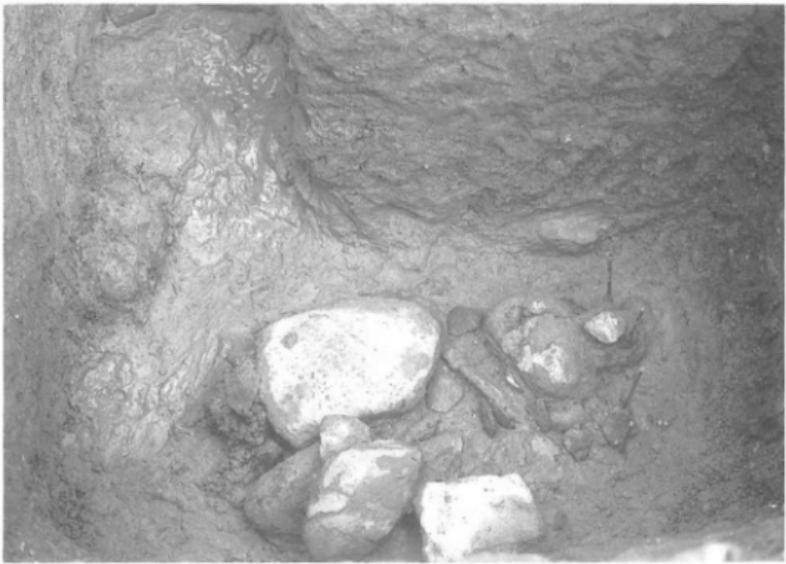
TP. 19 土層壁面



TP. 19 造構検出状況



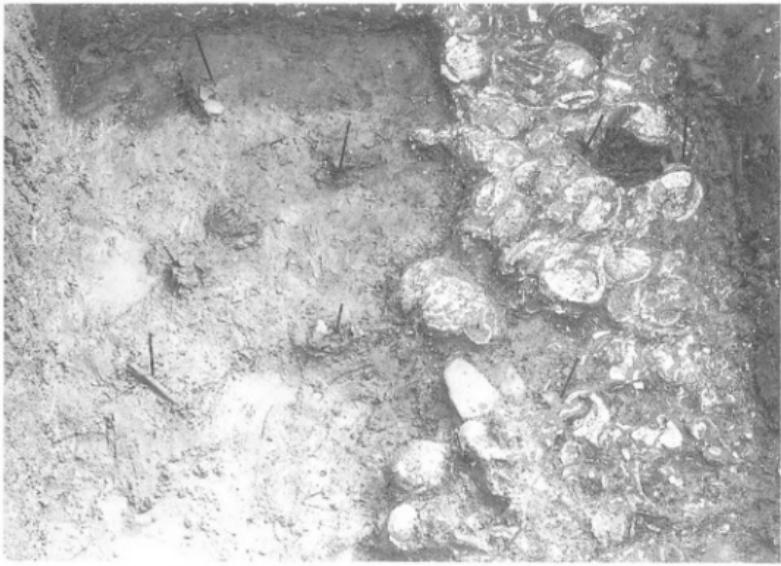
TP. 7 土層壁面



TP. 7 遺物出土狀況



TP. 17 貝塚検出状況(北から)



TP. 17 貝塚検出状況(西から)

りを捉えることができた。縄文時代の遺跡は、砂丘基部付近(TP. 19)と砂丘先端から北側の低地および丘陵傾斜面の一部にかけての地域(TP. 7・9・16・17)の2つのブロックに拡がりが判明した。古墳時代後期～奈良時代(～中世)の遺物包含層は、砂丘の後背地に拡がりをもち、砂丘裏側には貝塚が帶状に存在することが明らかとなった。

(宮崎)

III. 出土遺物

今回調査で出土した遺物は2,600点余有り、時代的には縄文時代前期から中世に及ぶ資料である。以下、出土遺物についてとりあげたい。

1. 石器(第5～7図)

TP. 7・8・17・19から、石鎌、石鋸、サイドブレイド、ビエスエスキュー(楔形石器)、スクレイパー、礫器、石斧、石錐、叩き石、使用痕ある剝片、剝片、砥石等が出土している。

石鎌(1～7) 2は安山岩製でそれ以外は黒曜石製。6の剝片鎌以外は打製石鎌である。7は形態が左右非対称形をなしている。1はTP. 7の出土。2～4・6・7はTP. 17の出土であるが、3が6～7層、2・6が5層、4が4層からの出土である。7は壁からの出土である。6～7・5・4の各層から各種の形態の石鎌が出土している訳であるが、3は曾畠式土器に伴うものかもしれない。5はTP. 8の1層からの出土。

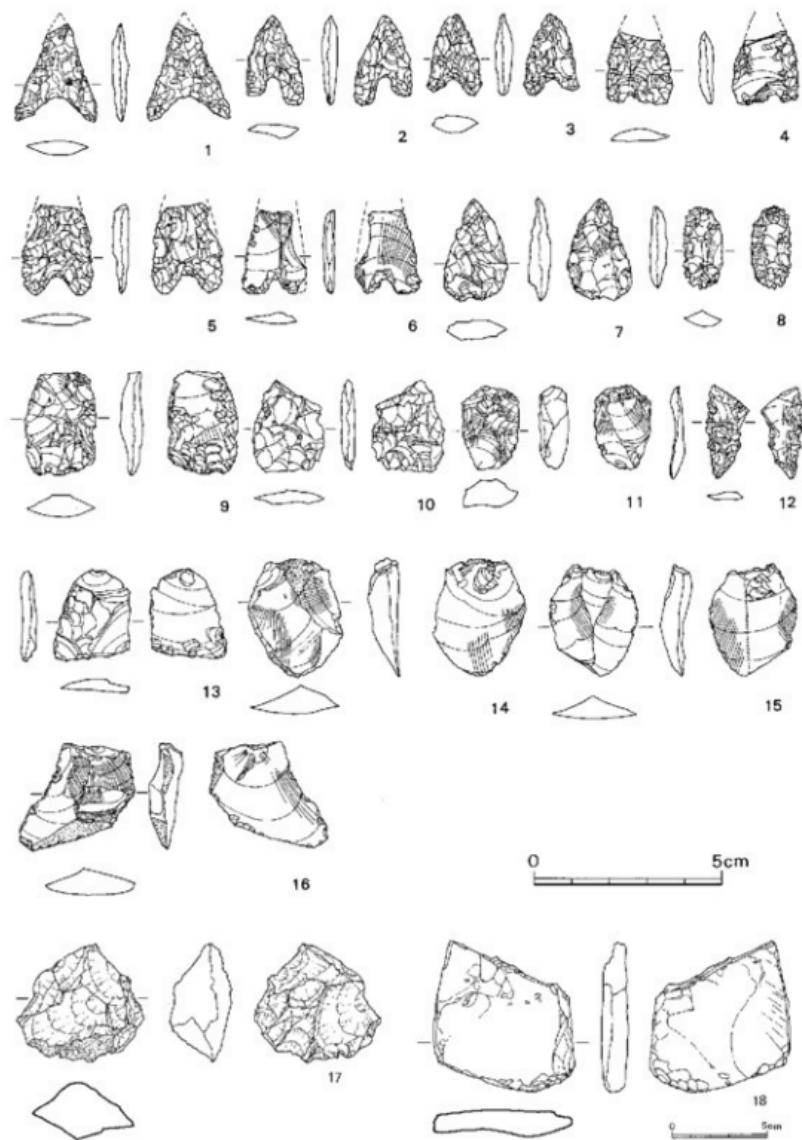
石鋸(8) 黒曜石製で片側縁にのみ鋸歯加工を施している。小形(縦2.2cm、横1.0cm、厚さ0.5cm)である。TP. 19の4～5層出土。12も鋸歯加工を施している。良質の黒曜石製TP. 19の3～5層の出土。

サイドブレイド(9・10) 2点とも黒色の黒曜石製。9は裏面に一次剝離面を残している。9はTP. 19の3～4層出土。10はTP. 17の6～7層出土。

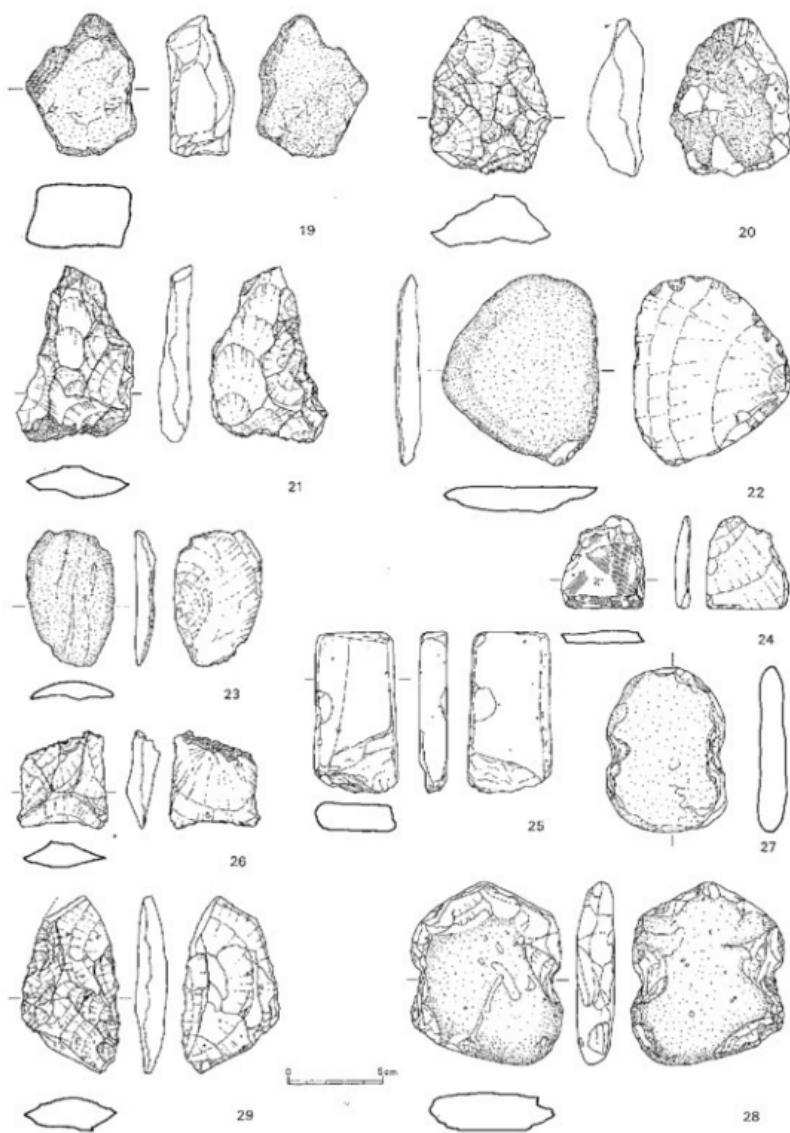
ビエスエスキュー(楔形石器)(11) 黒色の黒曜石製。上端に残った平らな面にはパンチ痕が残っている。TP. 19・4～5層出土。

スクレイパー(17・18・20・21・29・30・32) 17・20・21・29の資料は石核の剝離痕のような粗い剝離痕をもつスクレイパー。いずれも安山岩製。17はTP. 7、I層、20はTP. 7、5～6層、21はTP. 19、4～5層、29はTP. 7、5～6層の出土である。30は安山岩製で逆「T」字状に片側からのみ調整を施して刃部を作出している。TP. 16、1～3層の出土。32は安山岩製で、やや角度のある刃部を作出している。TP. 7、5～6層の出土。

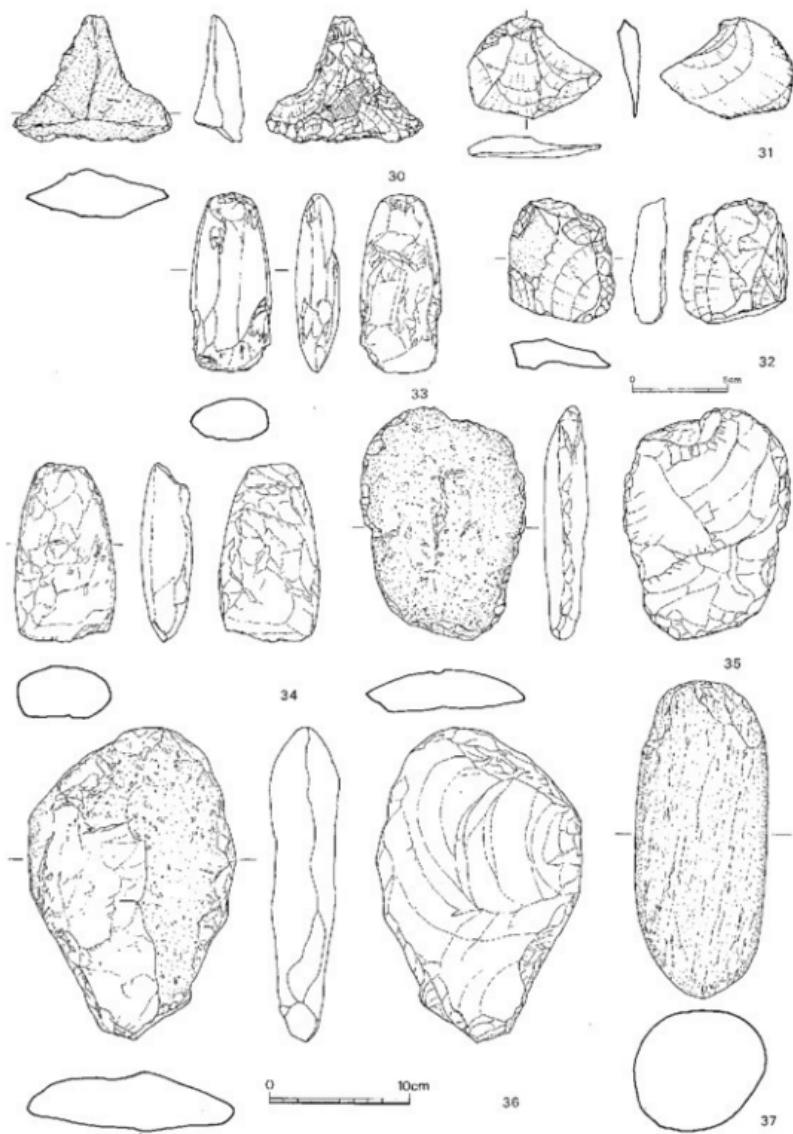
礫器(22・35・36) いずれも海浜円礫を薄く荒割りして礫器として利用したものであろう。36の資料は大きい(縦23cm、横14.6cm、厚さ5.0cm、重さ1.73kg)。この36と全んど同じ資料で大きめの資料(縦26.1cm、横15.4cm、厚さ5.0cm、重さ2.2kg)が、TP. 17、8層から出土している。なお、福江市中島遺跡からは、大きさは36等より小さいが、類似資料が北久根山式、鎌ヶ



第5図 出土石器①(1~16は2/3、17・18は1/3)



第6図 出土石器②(1/3)



第7図 出土石器③(30~32は1/3、33~37は1/4)

崎式土器に伴って出土している。^(註1) 22はTP. 7、5～6層、35はTP. 17、8層、36はTP. 17からの出土である。

石斧（24・33・34） 形態的には34がやや幅広である。33はTP. 17、8層、36はTP. 17からの出土である。24はTP. 7、5～6層からの出土。

石錐（27・28） いずれもTP. 7、5～6層の出土である。28がやや大きい（縦9.8cm、横8.1cm、厚さ2.0cm、重さ230g）。

叩き石（37） 上下両端に明瞭な叩き痕がついている。長さ22.4cm、幅9.3cm、重さ2.9kg、TP. 17、8層からの出土である。

使用痕ある剝片（16・31） 16は黒色の黒曜石製。TP. 7、7～8層。31は安山岩製、TP. 17、6～7層の出土である。

剝片（14・15・26） 14・15は黒色の黒曜石製。26は安山岩製である。14はTP. 17、4層、15はTP. 17、5層、26はTP. 7、7～8層の出土である。他に二次加工を施した石器として13・25等がある。13はTP. 7、7～8層の出土。25はTP. 7、7～8層の出土。

砥石（19） 砂岩製の砥石である。片側の面にのみ平滑な面が残っている。TP. 7、5～6層の出土。

（村川）

2. 繩文土器（第8・9図）

1～21は、TP. 17の6～7層と8層出土品。22～29はTP. 7、30～35はTP. 19出土土器である。時期的には、繩文前期終わり頃から晩期までの資料である。

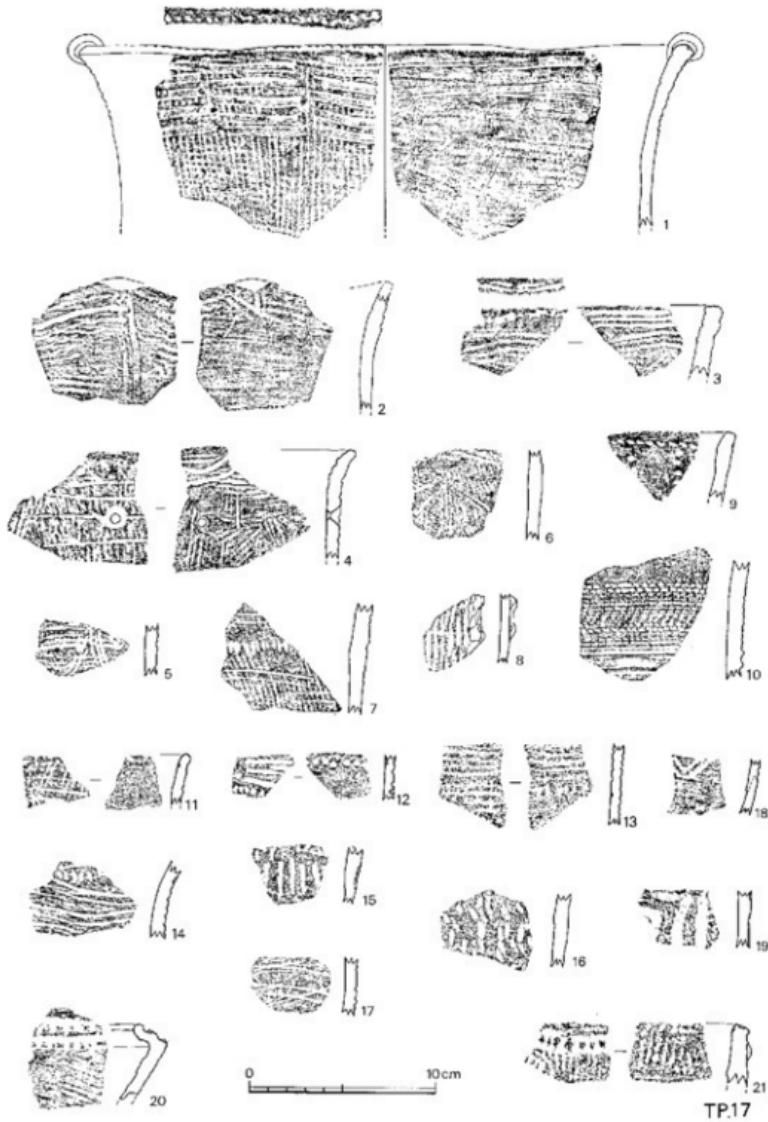
（1）繩文前期の土器

轟C・D式（1～8） 条痕を地文とし、内外面に直線文・波状文・刺突文を施す土器である。1～4は、口縁から胴部にかけての破片で、2は波状をなし、1には丸い耳状の突起が付く。5～8は胴部破片で、6の上端には片戻腹縁文、8は縦に小さな山形の突起が貼り付けてある。全てTP. 17出土品で、1・2・4・7・8は8層、他は6～7層から出土。

尾田式（9・10） 水ノ江和同氏が、熊本県玉名郡天水町尾田貝塚出土資料を標式として命名した土器である。器表は平滑にナデ調整され、外面に連続の刺突文や押引文を施している。10は下端に低い隆脊が認められる。TP. 17の9は6～7層、10は8層出土。

曾畠III式（11～17・30） 曽畠式の新しい様相をもつものを抽出した。赤褐色の色調をもち、短沈線文や刺突文を施し、滑石は含んでいないが12・14・17には雲母や結晶片岩粒が混入されている。11～17はTP. 17出土品で、11・12・17が8層、他は6～7層出土。30はTP. 19の3～5層出土。

その他の土器（20・21） 20は、逆「く」字形に折れる口縁部片で、沈線と刺突文を施す。外面が条痕であり、轟式系統の可塑性ももつ。TP. 17の6～7層出土。21は、内面に殷をもつ口縁部片で、内外面ともに繩文を地文とする。さらに、外面には隆脊に半戻竹管状施文具によ



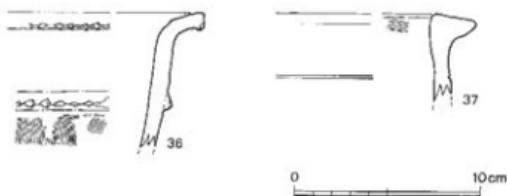
第8図 出土土器①(1/3)



TP. 7



TP. 19



0 10cm

第9図 出土土器②(1/3)

る連続の刺突を施し、口唇上方と内方に刻目を入れている。瀬戸内系統の上器であろう。TP. 17の8層出土。

(2) 繩文中期の土器

並木式 (18・31) 両者ともに滑石を多く胎土に含んでおり、18は2条の押引文、31は浅い凹線と半截竹管状施文具による刺突を連續的に施している。田中良之氏の分類によれば、18は並木I式、31は並木II式に相当する。18はTP. 17の6～7層、31はTP. 19の3～5層から出土す。

阿高式系土器 (19・22～25・32) いずれも赤褐色の色調で、滑石を多く含んでいる。19・22・24・32は外面に太形凹文を施すが、24は幅狭で時期が下る資料であろう。23は凹点文を口縁付近に施している。25は、「X」字状に粘土紐を貼り付けたもので、南福寺式であろう。19はTP. 17の8層から出土したが、調査時の混入であろう。22～25はTP. 7出土品で、22・24は7～8層、25は5～6層、23は排土採集品である。32はTP. 19の3～5層から出土す。

(3) 繩文後・晩期の土器 (26・27、33・34、28・29、35)

26・27は、TP. 7出土器で北久根山式である。26は粗製深鉢口縁部で、斜めに短沈線を施している。27は精製浅鉢で、外面上半は磨消繩文に2条の沈線で山形文を描いている。26は7～8層、27は8層下部出土。33・34は、TP. 19の3～5層出土品で、外面に曲線的な沈線文を施しており、薄手づくりで同一個体と思われ、鐘ヶ崎式と考えておきたい。

28・35は、粗製深鉢口縁部片である。内外面に条痕を施し、35には下端に低い隆帯が付いている。28はTP. 7の5～6層、35はTP. 19の3～5層出土す。

29は、粗製浅鉢で外面に布目の組織痕が付くものである。TP. 7の7～8層出土で、繩文晩期後半の資料であろう。

3. 弥生土器 (第9図)

今回調査で弥生土器として抽出できたのは数少なく、2点を図化した。

36は、口縁が如意形に外湾する弥生前期末の壺破片である。口縁下端と尖端に刻目を有する。TP. 16の2層最下部出土。

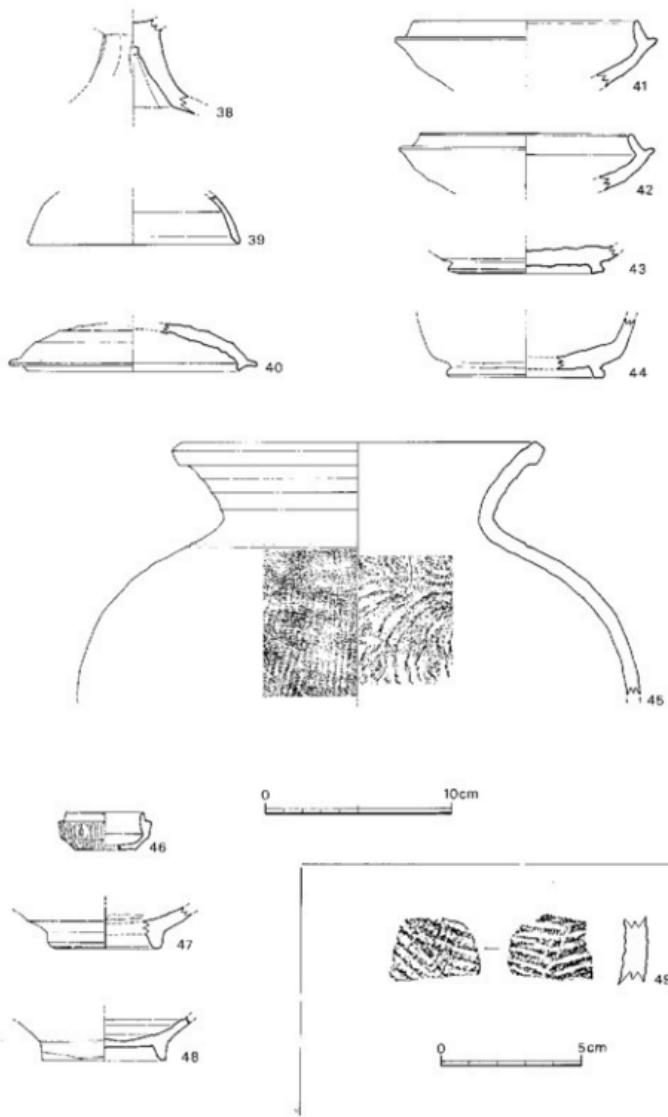
37は、口縁が断面三角形をなす弥生中期初頭の壺破片である。胴上半には沈線が1条めぐる。TP. 7出土。

4. 古墳時代～中世の遺物 (第10図)

当期の遺物は、砂丘裏側の後背地からの出土が目立った。

(1) 土師器 (38・49)

38は、高杯脚部である。スカート状に筒部が開き、さらに裾部は広がる形状をもつ。内外面ともケズリが施されている。古墳時代前期の資料であろうか。TP. 16排土採集品である。



第10図 出土土器③(1/3・1/2)

49は、外面に格子目タタキ、内面に青海波の当具痕を有する小壺で、玄海灘式製塙土器と呼ばれているものである。古墳時代末～奈良時代の資料であろう TP. 8 の 3～4 層出土。

この他に、カマド形土器の破片が、TP. 14 の 4 层、TP. 16 の 2 层などから出土している。

(2) 須恵器 (39～45)

39・40は、杯蓋である。39は、口縁内部に淡い段を残すが、天井部付近は丸みをもつ。40は内面のかえりを有し、つまみが付くものであろう。39は 6 世紀後半代、40は 7 世紀後半代の資料であろう。39は TP. 17 の 4 层、40は、TP. 18 の 1 层出土。

41～44は、杯身である。44・42は、ほぼ同じ形状をもち、立ち上がりは割と高いが、口唇の段は無く、体部にはヘラケズリが及んでいない。6 世紀後半代の資料である。43・44は、有高台杯である。高台は小さめで、ややふんばりをもつ。43は底部と体部の境界付近に稜がはいり、44は体部が丸みをもち立ち上がる。43は 8 世紀前半、44は 8 世紀中頃に位置づけられる資料であろう。41～44は、TP. 14 の 4 层から出土している。

45は、上半部が復原できた甕である。口縁は朝顔形に外湾し、端部は玉縁状に外方にふくらみを有する。体部は丸く張りをもっている。胴部外面には格子目タタキ、内面には青海波の当具痕が付く。TP. 14 の 4 层出土。

(3) 輸入陶磁器 (46～48)

今回調査で、中国製輸入陶磁器は33点出土している。種類別に分けると、青磁 2 点、青白磁 1 点、白磁 30 点で、白磁の出土が目立つ。時期的には、9～13世紀代に及ぶ資料である。

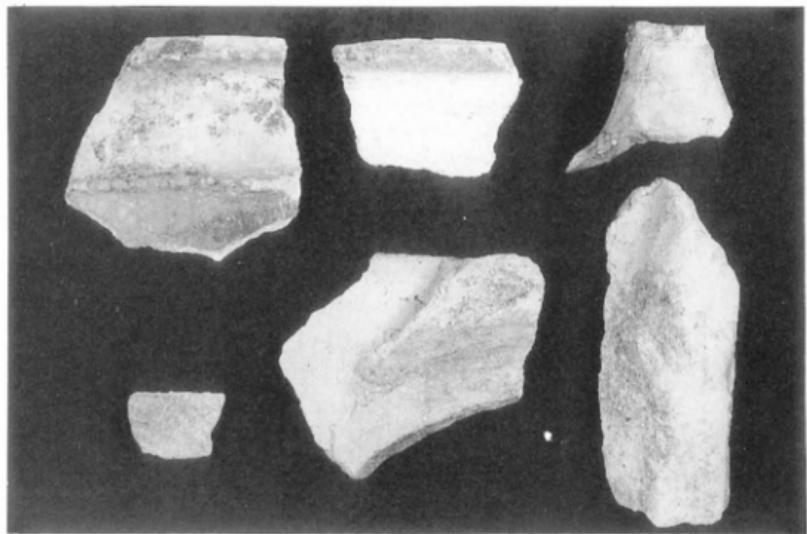
青磁は、図示した47の越州窯系統と、森田勉・横田賢次郎氏分類^(註4)（以下森田・横田分類とする）の龍泉窯系統椀 I～4 類の 2 点である。47は底部小片で、風化を受け釉が剥落している部分もあるが、全体に緑黄色釉がかかっていたものと考えられる。森田・横田分類の I～2 類であり、9～10世紀代の資料である。TP. 7 の 5～6 层出土。

青白磁は、図示した 1 点にすぎない。46は、合子身である。体部には型押しによる菊花弁文がはいり、体部と内面に淡青緑色のガラス質釉がかかる。11世紀中頃～12世紀初頃の資料であろう。TP. 8 の 3～4 层出土。

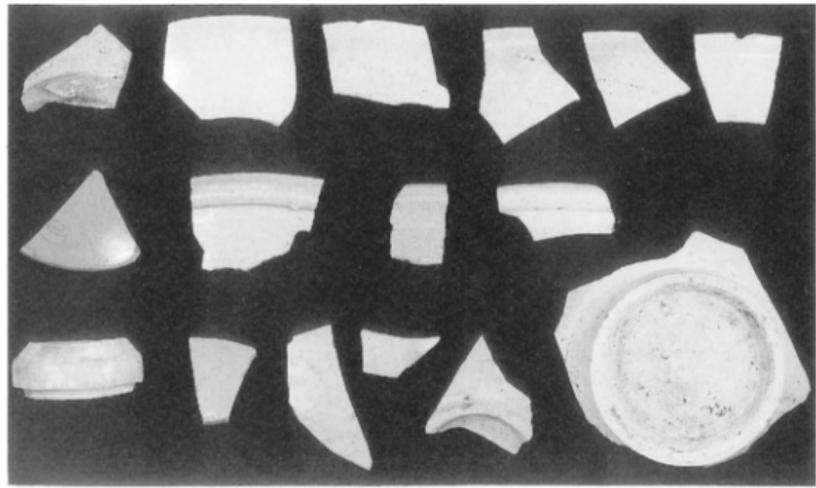
白磁は、器種別にみると椀 24 点、皿 6 点に分けられる。森田・横田分類によれば、椀 III 類 1 点、IV 類 1 点、V 類あるいは VIII 類が 22 点である。皿は、II～1 類 1 点、IV～1 類 5 点である。48は、細く削り出した高台をもつ底部片で、内面見込に段がつき、蛇ノ目状に釉を掻き取っている。森田・横田分類の VII 類である。TP. 8 の 3～4 层出土。これらの白磁は、11世紀中頃～12世紀初頃に包括される資料である。

(4) その他の遺物 (写真図版)

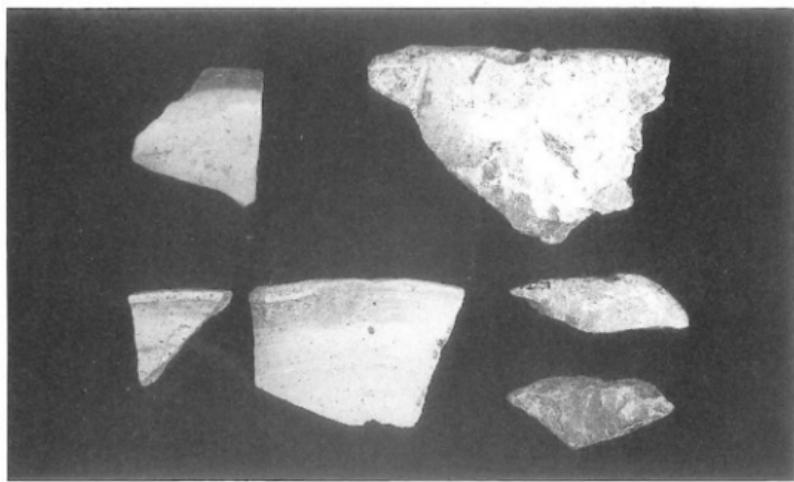
その他の土器に、図示していないが、瓦器椀と瓦質こね鉢がある。いずれも、TP. 8 の 3～4 層から出土している。滑石製石鍋は、TP. 7 の 5～6 层から 5 点、TP. 8 の 3～4 層から 1 点の計 6 点出土しており、器形が判断できる TP. 7 出土品は耳が付く古いタイプのものである。



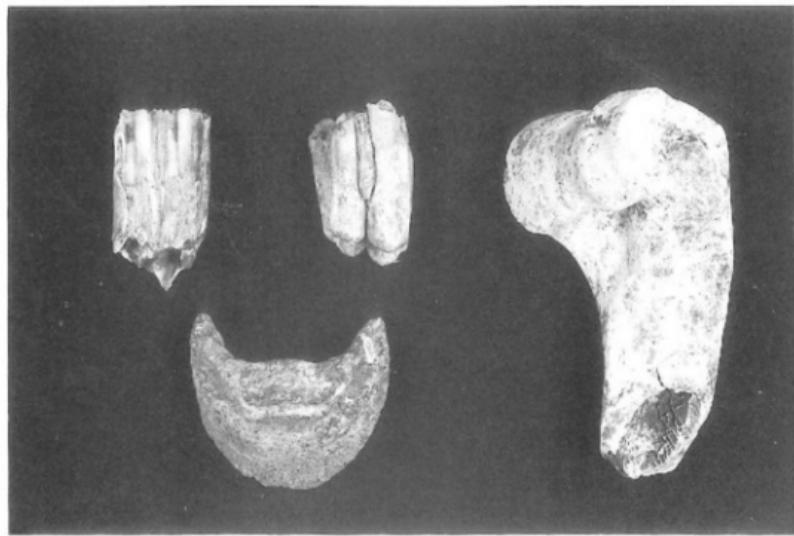
弥生土器・土師器・製塩土器・カマド形土器(1/2)



輸入陶磁器(1/2)



瓦器片・瓦質こね鉢・滑石製石鍋(1/2)



獸骨(1/2)

白磁群と対応する資料であろう。漁撈関係遺物では、管状土錘がTP. 7から2点出土している。

この他、貝塚出土の貝類、獸・魚骨類が多量に出土しているが、今回は鑑定していただくまでにはいたらなかった。別に機会があれば、専門家にお願いしたいと考えている。（宮崎）

- 註1. 村川逸朗「2. 石器」「中島遺跡」 福江市文化財調査報告書第3集 福江市教育委員会 1987
2. 水ノ江和詞「西九州の曾煙式土器」「伊木力遺跡」 多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 1990
3. 田中良之「中期・阿高式系土器の研究」「古文化談叢第6集」 九州古文化研究会 1979
4. 森田勉・横田賛次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集4」九州歴史資料館 1978

追記

奈良国文文化財研究所埋蔵文化財センターの松井章氏に、26頁の獸骨写真を送り鑑定をお願いしたところ、実物を見た方が良いが、左上の歯はウマ臼歯片、右のウマ左上腕骨（上下逆）、左下はウマ末節骨右（前後不明）のように見えますとの返事をいただいたのでここに追記する。

このことにより、ウマ牧と水産加工の生産遺跡が密接なつながりをもって存在していたことが考えられるようになった。末筆ながら御指導いただきました松井章先生に感謝申し上げます。

IV. 総括

今回の調査によって、縄文時代前期～鎌倉時代までの生活遺物や遺構が確認された。大づかみではあるが、遺跡の範囲を把握することができ、開発との調整を図るための基礎資料を整備する目的は達成することができたと思われる。以下、今回調査の成果を簡単にまとめたい。

- ① 縄文時代と古墳時代後期～奈良時代を主体とする遺跡の拡がりが捉えられた。
- ② 縄文時代の遺跡は、砂丘の基部付近と砂丘先端から低地と丘陵傾斜面の一部の2つの地域的な拡がりをもつ。敷石状の炉跡が発見されたが、住居や墓については今回明確にできなかった。おそらく、遺跡範囲として捉えた範囲のなかに存在していることが予測される。
- ③ 古墳時代後期～奈良時代の貝塚は、律領制による租庸調の古代税制、特に土地の特産品を貢納する調に関係した古代生産遺跡として位置づけることができる。貝塚は多量のアワビ貝を主体とするところから、『肥前国風土記』の倅嘉島の説明にある干アワビ等の水産加工品を製造する遺跡であった可能性が高い。本県では、類似の遺跡として、岩城郡勝本町^(注1)串山ミルメ浦遺跡をあげることができる。
- ④ また貝塚から馬と思われる骨が出土したことは、『肥前国風土記』に倅嘉島は馬・牛に富んでいると記載されていることに対応する事象として興味深い。牧の存在が付近に想定され、古代生産遺跡である本遺跡と密接な関係をもつてであろう。骨の真偽については、専門家の鑑定を待ちたい。
- ⑤ また、TP. 7から1点であるが、初期輸入陶磁器で貴重な越州窯青磁碗片が出土しており、古代から中国との交流を物語る資料として注目される。
- ⑥ 古墳時代後期～奈良時代の居住地については、今回調査では明確にすることができなかった。今後の調査に期待したい。

以上の今回調査の成果によって、町道本飯良平原線改良工事については工事に係らないことが分かったが、古里地区沿岸環境整備事業については、遺跡範囲に係ることが判明したので、早急に検討する必要があり、平成2年10月2日に県北振興局農政部と協議をもった。

その協議において、遺跡の保存・保護を目的とし、現状の地形をできるだけ残した環境整備を行う、施設の移動・設計変更・見直しを行う、遺跡周知・啓蒙のための説明板の設置等の検討案が出され、この協議案に基づいて、現在、県北振興局と町当局との検討が進められている。

(宮崎)

註1. 平川敬治編「串山ミルメ浦遺跡」 勝本町文化財調査報告書第4集 勝本町教育委員会 1985
2. 安楽 勉編「串山ミルメ浦遺跡」 勝本町文化財調査報告書第7集 勝本町教育委員会 1989
3. 宮崎貴夫編「串山ミルメ浦遺跡」 勝本町文化財調査報告書第8集 勝本町教育委員会 1990

宇久町文化財調査報告書第2集

宮ノ首遺跡

平成3年(1991) 3月31日発行

発行所 宇久町教育委員会

長崎県北松浦郡宇久町平郷2581番地5
〒857-49 ⑨0959-57-3111

印刷所 昭和堂印刷

長崎県諫早市長野町1007
〒854 ⑨0957-22-6000
